

## 06 日本文化デザイン会議



天日鷲  
忌部神社参拝記念

吉野川会場

平成 18 年 10 月 13 日

忌部神社での献茶式・結縁の茶

日本の喫茶風習の起源ははっきりしません。一般的には、聖徳太子の遣隋使を派遣以降わが国の僧侶が中国に留学し、あるいは彼の国の僧侶が日本に来遊することが多くなるにつれ喫茶の風習も伝わったのであろうと推測されています。おそらく奈良時代の初期には中国流の喫茶の風習が伝わったのでしょう。外国からの文化は朝鮮半島を経由してもたらされることが多いのですが、喫茶についてはこのルートによって

もたらされたとは考えられていないようです。



古い文献によると聖武帝の天平元年（739年）、行茶の儀式が内裏において举行されたことが記されています。天平勝宝4年（752）4月に行われた東大寺大仏開眼供養会（かいげんくようえ）の時には同じく行茶の儀式が執り行われました。この時代の行茶の儀式とは、仏に寄進をし功德を奉じたものが全員で茶を飲むことによって、仏と自分、そして周囲の者との縁を深め（結縁）、同じ味のことを全員で食することによって心をつにして団結する、というような意味があります。

同じものを食して団結感を高めるとするのは、「同じ釜の飯を食う」という表現に見られるとおり、我が国特有の感覚です。この感覚は中世時代の「一味神水」の儀式で更に強いものとなりました。「一味神水」の儀式とは役人の不正に対して直訴をするとき、お互いの心を団結させるため、起請文を書きそれを燃焼させて湯で溶きそれを飲みまわす、というものです。ここから、中世以降、強い団結力の集団の意味として「一味」という言葉が使われるようになります。また、「同心」から、江戸將軍の護衛部隊としての「同心」という言葉が生まれました。そして、神水の儀式は江戸時代に入ると様式化され、結婚式などの新郎新婦の固めの杯として定着します。

今日では欠くことのできない日本の風習になっています。



一味同心式は一堂に会したものが全員で茶を喫し、心を同じくしてことを成就しようとするものです、

本日は時間・会場の制約により、儀式のすべてを行うことはできません。また、神様への奉納ですので神式・仏式がまざった礼式になります。献茶式のおおよそを以下に記しましたのでご協力をよろしくお願ひします。

①太鼓・入場

②忌部総代のご説明・ご挨拶

③導師「二礼二拍手一礼」

一同「二礼二拍手一礼」

1 姿勢を正す

2 背中を平にし、腰を 90 度  
曲げ、礼（拝）を 2 回行う

3 胸の高さで手をあわせ、  
右指先を少し下に向ける

4 2 回手を打ち、指先をそろえる

5 手をおろし、礼（拝）を 1 回行う



④ 點前敬礼・點前開始

参加者全員に茶が配られる

⑤ 茶を瀉れ神前に供える

⑥ 神前で茶碗の蓋が取られるのを合図に全員が茶を飲む

⑦ 導師「二礼二拍手一礼」

一同「二礼二拍手一礼」